JSPS
STOCKHOLM

ニュースレター 63号

2019.8.6

ページ

プロローグ	1
ニュース	3
セミナー参加者によるレポート	7
訪問・来会記録	9
北欧・バルト三国の学術・研究助成機関の紹介	11
北欧・バルト三国で活躍する日本人研究者の紹介	15
学術動向	17
お知らせ	22

プロローグ

姓が先か名が先か

JSPSストックホルム研究連絡センター長　津本　忠治

最近、日本政府の複数の閣僚から日本人のローマ字表記を「姓→名」の順にすべきだとする発言があったことが相次いで報道されている。2019年5月21日に出た朝日新聞デジタル版によると柴山昌彦文部科学大臣が記者会見でそのようにすべきと呼びかけたとのことである。その記事によると、すでに2000年に当時の文部相の諮問機関「国語審議会」が「ローマ字表記においても日本語表記と同様に姓→名の順にすることが望ましい」という答申を出しているという。柴山大臣の呼びかけは改めてその答申を尊重したいというもののようである。また、並行して河野太郎外務大臣がそのように海外メディアに要請する方針であることも報道されている。ただ、菅義偉内閣官房長官は「これまでの慣例など考慮すべき要素が多々ある」と慎重な考えであるという。

ウィキペディア（https://ja.wikipedia.org/wiki/姓）によると日本人の姓名をローマ字で表記する時に、本来の順序を逆転して「名→姓」とする慣習は、明治の欧化主義の時代に定着したものであり、欧米の人名の形式に合わせたものであるという。現在でもこの慣習は広く行われており、日本国内の英字新聞や英語の教科書も、日本人名を「名→姓」順に表記しているものが多いとも記載されている。欧化主義の是非は別にして、実際、「名→姓」順が明治初期にすでに定着したことは小生の手元にある日本とスウェーデン外交関係樹立150周年記念誌（参考文献1）でも確認することができる。この記念誌には岩倉具視欧米派遣使節団の伊藤博文副大使（後の初代内閣総理大臣）が当時のスウェーデン王国オスカルビョーンシャーナ総理外務大臣に送った1873年（明治6年）5月19日付けの礼状のコピーが掲載されているが、それにはHirobumi Itoとのサインが記されている。上記の国語審議会の答申の背景には、明治以来の「名→姓」順の表記は欧化主義の結果であり、本来の日本文化を尊重すれば「姓→名」とすべきという考えが背景にあるようである。

ただ、小生には一歩日本を出て、欧米の人達とスムーズな、或いは友好的な人間関係を築くには必ずしも「姓→名」の順にこだわるべきではないと思われる。スウェーデンを含めた欧米社会では、初対面の時以外ではファーストネーム、つまり名前、で呼ばないとよそよそしい感じとなり人間関係を損なうことになり兼ねない場合が多い。言い換えれば、日本文化の伝統は日本文化として尊重すべきであるが、欧米においては「姓→名」という名前の呼び方に固執すべきではないと思われる。事実、以下に述べるように日本文化を尊重し伝統を守るべきと主張する日本の方々も外国人と握手で挨拶することにはこだわりはないようである。

握手は日本文化にはないが

初対面の人と会った時、日本の慣習では一定の間隔で対面してお礼或いはお辞儀を交わすことが普通である。この場合、お辞儀の角度が問題となることがあるが、欧米のように握手を交わすことは日本文化の伝統にはない。江戸時代以前の庶民やお侍或いはより儀礼を重んじるお公家さんが握手を交わすことは想像すらできない。しかるに、「名→姓」順の表記は欧化主義の結果であり日本人は名前の順序を「姓→名」にすべきと主張している日本文化重視の人々も外国人との挨拶には何のためらいもなく握手しているように見える。

（撮影 和泉一義）

（次頁に続く）

プロローグ

Andreas Breitling（https://pixabay.com）

自分は日本文化を尊重しているとして、外国人と握手せずにお辞儀だけで挨拶を交わす人がいるだろうか？スウェーデンを含め欧米では非常に親しい間柄になるとハグが一般的なようであるが、初対面時の挨拶はほとんどの場合握手で始まる。この握手による挨拶は最近ではもはやグローバルに一般化した儀礼の習慣となっており、国際的な場では日本人同士でも握手することが多くなっている。初対面時に握手と同時に名前を名乗って自己紹介することは挨拶の第一歩であり、その名前の順序は相手が理解し覚え易いようにすべきであろう。実際、上述のように、ほとんどの日本人は自己紹介や握手による挨拶等はそのようにふるまっている。

郷に入っては郷に従え

世界の多くの国や地域では「名→姓」の順であるが、日本、中国、韓国等の東アジアを含めいくつかの例外的な国或いは地域があるという。これも良く知られているように、ヨーロッパではハンガリーは独特の言語や慣習を持ち姓名の順序も「姓→名」であるという。ただ、スウェーデンを含めてヨーロッパさらには世界の多くの国では「名→姓」の順であるので、ハンガリー出身の人も他国で名前を名乗る時にはその順番にされているようである。例えば、小生の知己でスウェーデンに長く在住されているハンガリー人の方の名刺は「名→姓」になっており、セミナーの講演等で紹介する時にはその順序で読み、雑談や日常会話でも名だけで呼び合っている。その方によると、スウェーデンはハンガリーではないので、当地の慣習に従って「名→姓」とすることは至極当然で何のこだわりもないという。ヨーロッパで多くの国に挟まれてしたたかに発展してきたハンガリー人らしい発想とも言えるが、日本にも「郷に入っては郷に従え」という古くからのことわざがある。スウェーデンを含めた欧米で親密な人間関係を築き、国際交流をさらに促進するには「郷に入っては郷に従え」に則して、「名→姓」で名前を呼称し、親しくなればファーストネームである名で呼び合うべきと思われる。

参考文献

1. Bert Edström バート・エドストロム著 Sverige-Japan スウェーデン－日本 150 ÅR AV VÄNSKAP OCH SAMARBETE 150年の友情と協力 Sweden-Japan Foundation, 2018

Gerd Altmann（https://pixabay.com）

ニュース

2019年度AKA-JSPSセミナーの開催

2019年5月15日、Helsinki Congress Paasitorniにおいて、フィンランド・アカデミー（AKA）、ストックホルム研究連絡センターの共催により、Radiation Detectors for Health, Safety and Security（RADDESS）Annual Seminarが開催された。当センターからは、吉原副センター長、和泉国際協力員が参加した。

本セミナーは、AKAの助成プログラムの年次報告会に位置付けられ、両機関の共催で開催するのは昨年度に続いて2回目となる。

初めに、RADDESSプログラムの運営委員長を務めるPetriina Paturiトゥルク大学教授から開会挨拶があり、引き続き吉原副センター長からJSPSのプログラムと活動内容について紹介があった。その後、山口雅浩東京工業大学工学院教授、Kaisa Vaaramaaフィンランド放射線・原子力安全庁（STUK）計測・分析実験室長から基調講演があった。引き続き、本プログラムに参加している研究者4名から、光学分野や放射線検出技術などに関する最新の研究内容や進捗状況について発表があった。本セミナーには約60名が参加し、閉会後の懇親会では参加者による情報交換や、会場内の研究発表用ポスターの前で質疑応答が行われるなど、学術交流の促進に資するセミナーとなった。

（山口教授によるレポートはP.7参照）

講演を行う山口教授

セミナーの様子

ポスター発表の様子

第4回STS forum European Workshop への参加

2019年5月16日、カロリンスカ医科大学（KI）において、NPO法人STSフォーラムの主催、KI、日本貿易振興機構（JETRO）、在スウェーデン日本国大使館の後援により、第4回STS forum European Workshopが開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長が参加した。

Ole Petter Ottersen KI学長、尾身幸次STSフォーラム理事長からの開会挨拶の後、前半のセッションではHenry A. McKinnell氏（ファイザー社名誉会長）が進行役を務め、「ICTによる健康と幸福」のテーマのもと6名のパネリストによる発表とパネルディスカッションが行われた。後半のセッションでは小谷元子理化学研究所理事が進行役を務め、「医療分野におけるAIの活用：機会とリスク」のテーマのもと、4名のパネリストによる発表とパネルディスカッションが行われた。最後に入野泰一JETRO理事、 Jerzy Duszyńskiポーランド科学アカデミー理事長の挨拶で閉会した。

開会挨拶を行う尾身理事長

パネルディスカッションの様子

開会挨拶を行うOttersen学長

ニュース

2019年度第1回国際統括本部会議及び海外研究連絡センター長会議への出席

2019年5月20日、本年度第1回国際統括本部会議及び海外研究連絡センター長会議が東京で開催された。本会議には、JSPS本部の理事長、役員、関係部課長、各海外研究連絡センター長が出席した。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長が参加した。

本会議は、里見進理事長の挨拶に始まり、JSPS本部における最近の主な動きについて各関係部長より報告が行われた。その後、各海外研究連絡センター長から、本年度の活動計画などについての説明があった。

会議終了後の懇親会には、各センター長やJSPS本部の関係者が参加し、センターの現状や取組等について、活発な情報交換が行われた。

2019年度第1回 KVA-JSPSセミナーの開催

2019年6月10日、11日、KI、ウプサラ大学において、スウェーデン王立科学アカデミー（KVA）とストックホルム研究連絡センターとの共催により、本年度第1回KVA-JSPSセミナーが開催された。当センターからは、津本センター長、吉原副センター長、吉中国際協力員が参加した。

本セミナーは、スウェーデンの各分野の研究で指導的役割を担うKVA会員の推薦に基づき、著名な日本人研究者を招へいして講演を行うもので、2009年度から開催している。

冒頭、当センターからJSPSのプログラムと活動内容についての説明を行った。その後、吉村崇名古屋大学トランスフォーマティブ生命分子研究所教授から、動物をモデルとしてうつ病などの季節依存症に関して講演が行われた。

本セミナーには2日間で約50名が参加し、講演後の質疑応答では多くの質問が寄せられた。

（吉村教授によるレポートはP.8参照）

講演を行う吉村教授

2019年度第2回 KVA-JSPSセミナーの開催

2019年6月13日、14日、18日、AlbaNova University Center、ウプサラ大学において、 KVAとストックホルム研究連絡センターとの共催により、本年度第2回KVA-JSPSセミナーが開催された。当センターからは、津本センター長、吉原副センター長、和泉国際協力員、吉中国際協力員が参加した。

冒頭、当センターからJSPSのプログラムと活動内容についての説明を行った。その後、福来正孝東京大学国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構教授から、宇宙進化に関する銀河の物理的作用について講演が行われた。

本セミナーには3日間で約130名が参加し、講演後の質疑応答では多くの質問が寄せられた。

講演を行う福来教授

ニュース

RCN-JSPSセミナー開催に係る打合せの実施

2019年6月18日、ノルウェー研究評議会（RCN）において、本年10月に開催予定のRCN-JSPSセミナーに関する打合せが行われた。RCNからはJulie Christiansenシニアアドバイザー、JSPSノルウェー同窓会（ACN）からはAnders Øverby会長、 Bruno Laeng幹部会委員、JSPS本部からは課長代理、ストックホルム研究連絡センターからは、吉原副センター長、和泉国際協力員が参加した。

打合せでは、RCN、ノルウェー国際協力･高等教育推進庁（Diku）、ACNとの共催で本年10月に予定されているRCN-JSPSセミナー及びACN設立記念式典の円滑な実施に向けて、現時点での準備の進捗状況や必要事項について確認した。

打合せの様子

JSPSノルウェー同窓会設立にあたっての説明会の実施

2019年6月19日、RCNにおいて、ACN設立に伴う説明会が行われた。本年4月にACNが設立されたことを受け、JSPS本部から課長代理が現地を訪問し、ACN幹部会委員や関係機関であるRCNに対してJSPS同窓会の概要及び今後の活動支援について説明を行った。ACNからは Øverby会長、Laeng幹部会委員、RCNからはChristiansenシニアアドバイザー、ストックホルム研究連絡センターからは、吉原副センター長、和泉国際協力員が参加した。

冒頭、課長代理からJSPS同窓会の概要について説明した後、他国のJSPS同窓会の取組やBRIDGE Fellowship Programの紹介を行った。その後、同窓会の適切な運営に向けて意見交換を行った。

前列左端から：Øverby会長、Laeng幹部会委員
後列左端：課長代理

2019年度JSPSフィンランド同窓会幹部会の開催

2019年6月24日、JSPSフィンランド同窓会（ACF）幹部会がSkypeを利用して開催された。ACFからはVille Syrjälä会長、Michael Gasik副会長、Joni Kujansuu幹部会委員が、ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長、石井現地職員が参加した。

冒頭、Syrjälä会長、津本センター長からの開会挨拶の後、現幹部会委員の五十嵐圭日子氏（東京大学准教授）の退任に伴い、新委員の選考が行われ、 Jyrki Saarinen氏（東フィンランド大学教授）が新たな幹部会委員候補に選出された。同氏は今後、同窓会総会での承認を経て、正式に幹部会に加わる見通し。その後、本年12月に予定されているACF設立10周年記念式典やAll Alumni Meetingの開催に向けた準備の進捗状況の確認や今後の必要事項について意見交換を行った。

Saarinen
新幹部会委員候補

【写真出典】University of Eastern Finland
https://www.uef.fi/en/web/photonics/jyrki-saarinen

ニュース

国際工学アカデミー連合（CAETS）年次会合への参加

2019年6月25日から28日まで、ストックホルムにおいて、国際工学アカデミー連合（CAETS）の年次会合及び関連行事が開催された。

まず、6月25日から27日、ストックホルムのNorra Latinにおいて、 CAETS の年次会合が開催された。CAETS（International Council of Academies of Engineering and Technological Sciences）は、世界26か国の工学・科学技術アカデミーで構成される組織である。本年は主催機関であるスウェーデン王立工学アカデミー（IVA）の100周年にあたる年であることから、100周年記念を兼ねて年次会合が開催された。IVAの招待を受け、ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長が参加した。

冒頭、CAETS会長を務めるTuula Teeri IVA会長、Ruth A David CAETS事務局長、Ibrahim Baylanスウェーデン産業・イノベーション大臣から開会挨拶が行われた。

本会合は、「より良い世界を築く－新たな100年に向けて」を全体テーマとして、初日は、社会と科学分野に大きな影響を及ぼした主要な科学的・工学的成果や社会が直面する将来の課題について、そして、翌日は工学の未来と工学が果たす役割について、それぞれアカデミー会員による講演が行われた。3日目は、全体の総括として、関係分野の政策提言や産学連携に関する意見交換が行われた。

最終日の6月28日は、参加者を対象に主催機関であるIVAの施設見学などが行われ、全日程を終了した。

開会挨拶を行うTeeri IVA会長（左）と David 事務局長（右）

開会挨拶を行うBaylan大臣

講演を行うHatti-Kaulルンド大学教授

JSPSノルウェー同窓会新幹部会委員の就任

2019年7月、ACNの活動を強化する目的で、Alexander Karl Rothkopf氏（スタヴァンゲル大学准教授）が新たに幹部会委員に加わることが決定した。

同氏を加え、幹部会委員は全部で6名。ACNは本年10月に設立記念式典とRCN-JSPSセミナーのほか、年内に同窓会セミナーの開催を予定している。同氏の就任により、更なる活動の充実が期待される。

【写真出典】Universitetet i Stavanger
https://www.uis.no/article.php?articleID=124594&categoryID=11198

Karl Rothkopf
新幹部会委員

セミナー参加者によるレポート

2019年度AKA-JSPSセミナーに参加して

東京工業大学工学院教授　山口　雅浩

2019年5月15日にフィンランドHelsinki Congress Paasitorniにて開催された標記セミナーに出席した。このセミナーはAcademy of Finland（AKA）が実施するプログラムの1つであるRADDESS（Radiation Detectors for Health, Safety and Security）をテーマとしており、AKAとストックホルム研究連絡センターの共催で開催された。また、UNESCOの国際光デー（5月16日）の関連企画とも位置付けられている。RADDESSプログラムは光や放射線等のセンシング技術の健康・安全・安心分野への応用をテーマとし、予算規模は1,200万ユーロ、2018～2022年の期間で、新しいイメージング技術、安全・安心技術、放射検出器の物理等の研究が実施されている。今回はPlenaryを含めて5件の口頭講演とポスター発表が行われた。参加者は約60名であった。

はじめに、RADDESS 運営グループ主査のP. Paturi教授から本セミナーの趣旨とRADDESSの現状について説明があった。また、ストックホルム研究連絡センター吉原副センター長より、同センターの活動、日本とフィンランドの学術交流の動向などについて紹介された。

2件のPlenary講演のうち1件目は、筆者から“Spectral and Color Image Analysis Technology for Quantitative Pathology”と題して病理画像解析におけるカラー及び分光画像処理技術に関する研究動向を紹介した。なお、本題に先立って、分光画像技術における国際連携の活動についても触れた。筆者の研究グループでは特に分光画像技術に関してフィンランドの研究者と交流があり、JSPSの博士研究員等としての研究者の受入れ、本学博士課程学生の派遣などの実績がある。国際照明委員会（CIE）では、マルチスペクトルイメージングを取り扱う技術委員会の主査を東フィンランド大学（UEF）の研究者から筆者が引き継ぎ、2017年に技術報告書を出版した。その後、同じCIEでの新たな枠組みとして、分光画像に関するResearch Forumを設立し、フィンランドからも主要メンバーとして参画している。病理診断分野への応用に関しては、分光イメージング技術の適用に加えて、特に近年注目を浴びているいわゆるAI（人工知能）技術の応用を中心に、色情報を有効に扱う適用例や課題を紹介した。

次のPlenary講演はSTUK計測解析部門長のK. Vaaramaa氏から“Radioactive Substances in the Food Chain”と題して行われた。食品関連分野での放射性物質の検出について、空気・水・森林・魚・家畜等での様々な実例を紹介し、放射性物質のセンシング技術における課題を提示した。その後、RADDESSで実施中のプロジェクトから“Spectral Imaging of Complex Surface Tomographies”と題した講演があった。これは筆者の研究分野の1つでもある分光イメージングに関するもので個人的に興味深かった。MEMS（Micro Electro Mechanical Systems）技術を用いた新たな方式の分光カメラの開発、分光画像へ畳み込みニューラルネットを適用して皮膚がんの診断への応用等が進められている。また、“Universal Electromagnetic Radiation Detector”は極めて広い波長帯域の電磁的放射を検出する新しい検出器の技術、“Layered 2D Materials Based THZ Spectroscopy and Imaging”では近年発展の著しいテラヘルツ分光に関する研究に関しての発表で、いずれも興味深い内容であった。口頭講演の後、ポスターセッションにて他のプロジェクトの実施状況も発表された。フィンランドではフォトニクスに関する研究は特に活発であり、RADDESSも多数のユニークな研究内容のプロジェクトから構成されていることを知ることができた。

セミナー前日にはUEF Institute of Photonics所長J. Saarinen教授、Photonics Finland協会CEOのJ. Purmonen氏のアレンジにより、ヘルシンキ大学及び大手歯科用機器メーカーPLANMECAを訪問し、イメージングに関する研究や産学協同プロジェクト等の見学・議論を行うことができた。Purmonen氏も筆者らのグループで受け入れたメンバーの一人であり、その他旧知の研究者の現在の活躍を知ることができ、その点でも有意義な訪問であった。今後もフィンランドの研究者と密に交流しつつ国際連携活動も進めていきたいと考えている。

セミナー参加者によるレポート

2019年度第1回KVA-JSPSセミナーを終えて

名古屋大学トランスフォーマティブ生命分子研究所教授　吉村　崇

日本人は四季の移ろいを愛でる国民であり、サクラの開花やウグイスのさえずりを通じて春の到来を実感する。動物の行動の季節変化についてはアリストテレスの著書「動物誌」にも詳しく記述されているが、動物が季節を感知し、四季の環境変化に適応する仕組みは謎に包まれていた。生命を理解しようとする時、多種多様な生き物から最適なモデルを選ぶことが近道である。例えばマウスやショウジョウバエは生命科学の発展に大きく貢献してきたが明瞭な季節応答を示さないため、季節の研究には適当ではない。一方、鳥類は空を飛ぶため、生殖器を必要な時期だけ発達させる。特に雄では日照時間（日長）が長くなると、精巣がたった2週間で100倍以上も発達する。日長の変化にこれほど急速かつ劇的に反応する生物は珍しく、鳥類、とりわけウズラは季節適応の解明に最適なモデル生物といえる。我々はウズラが日長の変化に反応して繁殖を開始する仕組みの解明に取り組み、脳の下垂体隆起葉と呼ばれる部位から分泌される甲状腺刺激ホルモン（TSH）が脳に春を告げる「春告げホルモン」として働いていること見出してきた（Nature 2003; Nature 2008）。またその後の研究で、ウズラで見出した仕組みが鳥類だけでなく、哺乳類や魚類にも共通する仕組みであることを明らかにした（PNAS 2008; Nat Commun 2013; Cell Reports 2014）。

ウプサラ大学は北欧最古の大学であり、その中の生物医学センター（Biomedical Centre: BMC）は生命科学のヨーロッパ最大の拠点の1つである。そのウプサラ大学BMCのLeif Andersson教授は集団遺伝学の世界的な権威である。動物は家畜化される際に毛色の他、筋肉や脂肪の組成など、様々な形質について選抜されてきたが、Andersson教授は集団遺伝学的な手法を用いて、ニワトリ、ウマ、ブタなどの家畜化に寄与した遺伝子を同定してきた。その中で、Andersson教授はニワトリの家畜化にTSHRという遺伝子が関与していることを発見したが（Nature 2010）、この遺伝子は我々がウズラで春告げホルモンとして発見したTSHの受容体（TSH Receptor）であったという縁から、以前からメールなどを通じて研究打合せを行ってきたが、今回KVA-JSPSセミナーのプログラムを使って招へいしていただいた。

白夜で明るい夜の10時半にストックホルムに到着した翌日は、朝9時からカロリンスカ医科大学を訪問し、8人の研究者と順番に濃密なディスカッションをした後、夕方に“Molecular mechanisms of seasonally regulated reproduction and depression-like behavior”と題してセミナーを行った。また翌日もウプサラ大学BMCで朝8時半からディスカッションを行った後、“Evolution of Seasonal timers: Towards understanding the winter depression”と題してセミナーを行った。ヒトにおいても気分、免疫機能、代謝など、様々な生理機能が季節によって変化する。特に北欧のような高緯度地域では冬の日照時間が著しく短くなるため、10人に1人が冬季にうつ病になると言われている。また、心疾患、脳血管疾患による死亡や、肺炎、気管支炎などの呼吸器系疾患、あるいは精神疾患の発症率にも季節依存性が存在し、それらの多くは冬季に集中するが、その背後にある分子基盤は未解明である。我々は現在、動物をモデルとしてこれらの謎の解明に取り組んでおり、セミナーではそれらの取組について未発表の研究成果も含めて紹介したところ、オーディエンスから「スウェーデンにとって最適な研究テーマだ」、「自分も冬季うつ病である」などという御意見とともに、様々な質問やサジェスチョンをいただき、両日ともに非常に有益な時間を過ごすことができた。また、セミナー後もAndersson教授や研究室メンバーと毎日朝から晩まで共同研究の打合せを行った。Andersson教授には研究室の外においても、分類学の父で植物学者として知られるカール・フォン・リンネ（ウプサラ大学出身）の植物園を一緒に散策しながら様々な議論を交わしたり、ウプサラ大学の教員夕食会などのソーシャルアクティビティにも招待していただき、日本では決して味わうことのできない貴重な経験をさせていただいた。今回の招へいでは、雑務に忙殺されがちな日本での教育・研究現場を離れて、文化としての科学について見つめ直す機会をいただいたAndersson教授に厚く御礼申し上げる。また、ストックホルム研究連絡センターの津本忠治センター長、吉原誉夫副センター長、吉中真優国際協力員には航空券や宿泊の手配から、セミナー当日の会場の準備、プログラムの紹介に至るまで、至れり尽くせりの御対応をいただき、この場をお借りして心から感謝申し上げる。

講演する吉村教授

訪問・来会記録

関係機関への訪問

北海道大学欧州ヘルシンキオフィス訪問（2019年5月14日）

北海道大学欧州ヘルシンキオフィスを訪問し、 岡部赳大副所長と面会した。翌日に開催されたRADDESS Annual Seminarに参加するためにフィンランドを訪問し、その一環で吉原副センター長、和泉国際協力員が同オフィスを訪問した。JSPSフィンランド同窓会（ACF）副会長のMichael Gasikオールト大学教授も同席した。

同オフィスは本年12月に開催予定のACF設立10周年記念式典及びAll Alumni Meetingの共催機関であり、これらのイベントの開催に向けた準備の進捗状況の確認や今後の必要事項について意見交換を行った。引き続き、相互に連携し開催に向けての調整を行っていくことを確認した。

右端から：Gasik教授、岡部副所長

在フィンランド日本国大使館訪問（2019年5月14日）

在フィンランド日本国大使館を訪問し、大橋賢司一等書記官と面会した。翌日に開催されたRADDESS Annual Seminarに参加するためにフィンランドを訪問し、その一環で吉原副センター長、和泉国際協力員が同大使館を訪問した。北海道大学欧州ヘルシンキオフィスの岡部副所長も同席した。

本年12月に開催予定のACF設立10周年記念式典及びAll Alumni Meetingへの同大使館の協力を依頼した。その後、日本とフィンランドの学術交流の促進に向けて意見交換を行い、引き続き連携していくとの認識を共有した。

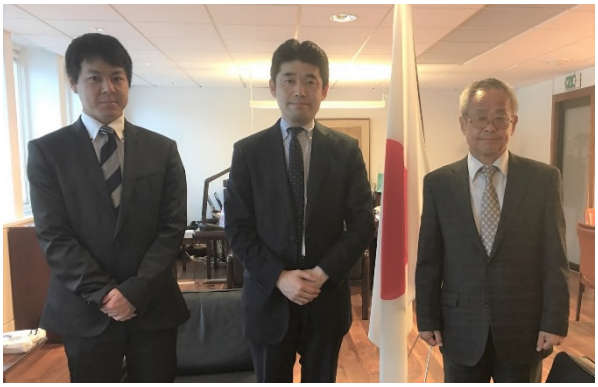
左：岡部副所長、右：大橋一等書記官

訪問・来会記録

在ノルウェー日本国大使館訪問（2019年6月18日）

在ノルウェー日本国大使館を訪問し、田内正宏在ノルウェー日本国大使と面会した。同日に開催されたRCNでの打合せに参加するためにノルウェーを訪問し、その一環で吉原副センター長、和泉国際協力員が同大使館を訪問した。

本年10月に開催予定のACN設立記念式典及びRCN-JSPSセミナーへの同大使館の協力を依頼した。田内大使から、同イベントだけでなく、両国の学術交流の促進のため継続的に協力するとのコメントをいただいた。



右端：田内在ノルウェー日本国大使

ストックホルム研究連絡センターへの来会

JSPS本部国際企画課課長代理の来会（2019年6月20日）

JSPS本部国際企画課課長代理が来会した。同課長代理は、前日に開催されたJSPSノルウェー同窓会設立にあたっての説明会に参加するためにノルウェーを訪問し、この機会を活用して当センターを訪問した。

当センターから、今後のセミナーの開催予定や同窓会活動に係る取組状況を説明した後、JSPS本部と海外研究連絡センターとの連携の在り方について意見交換を行った。

前列中央：課長代理

髙橋 佳代 理化学研究所上級研究員の来会（2019年6月28日）

髙橋佳代 理化学研究所上級研究員が来会した。同上級研究員は、今回ストックホルムで開催されたCAETS年次会合に参加するために来瑞し、この機会を活用して当センターを訪問した。

当センターから、活動状況やJSPS本部の助成プログラムについて説明した後、今後の日瑞の学術交流の促進の方策について意見交換を行った。

北欧・バルト三国の学術・研究助成機関の紹介

エストニア研究評議会（ETAg : Estonian Research Council）

エストニア研究助成機能の集約と質の向上を目的に2012年に設立されたエストニアの主要な研究助成機関。JSPS本部とは、「外国人研究者招へい事業（外国人特別研究員・一般）」等を通して連携。また、ストックホルム研究連絡センターとは2019年9月に共催による初めてのセミナーを開催予定。

1. 組織概要

〇設立：2012年

〇理事長：Indrek Reimand

〇事務局長：Andres Koppel

〇主な取組：

①研究者の支援

・エストニア人研究者に対する助成金の支援

・国際的なプログラムへの参加の促進と必要な助言、助成金の支援による国際連携の促進

②研究開発の評価・分析

・研究開発に対する外部評価の総合調整

・助成プログラムの有効性と効果の分析、新たに生み出された知的財産の監視等の実施

③科学普及啓発

・国民の科学に対する普及啓発

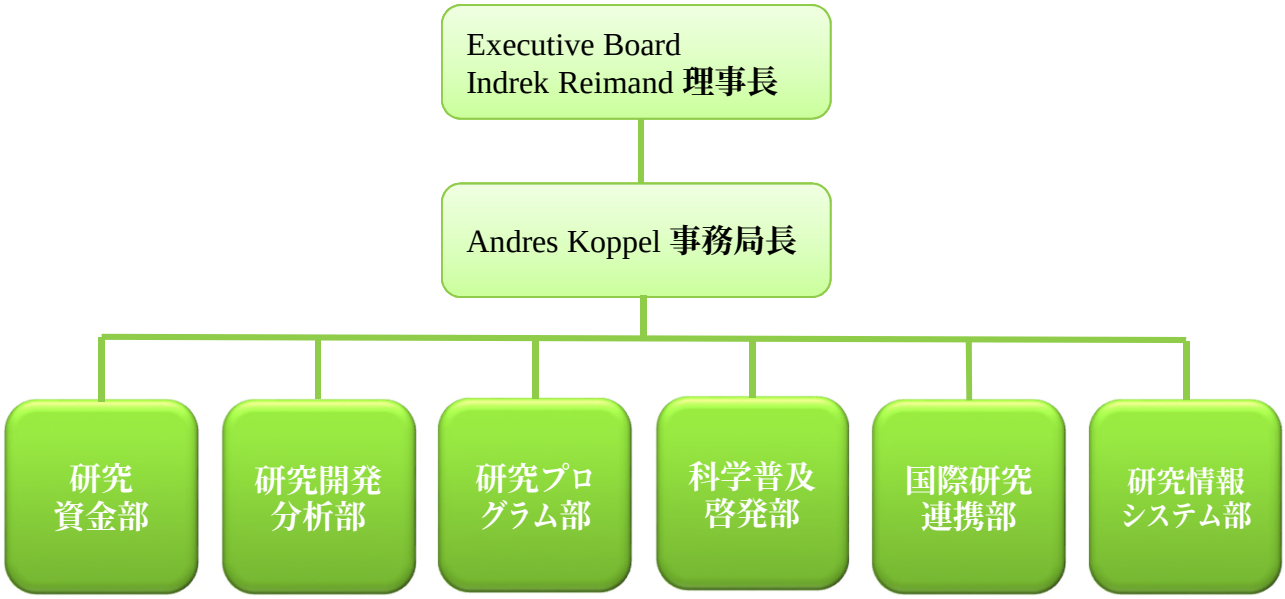
・若者を対象とした科学への興味関心を喚起するための様々なプログラムの実施

〇組織：最高意思決定機関である理事会の下、6つの関係部局で構成

〇組織図：

Andres Koppel事務局長

【出典】Estonian Research Council
https://www.etag.ee/teadusagentuur/kontaktid/administratsioon/0133_teadusagentuur/



北欧・バルト三国の学術・研究助成機関の紹介

2. 助成プログラムの概要

①研究助成（Research Funding）

・このうち個人研究や共同研究を対象とする個人研究助成金が最大規模

②研究者・研究機関交流助成（Mobility Funding）

・エストニア人研究者がエストニア以外の国で、海外の研究者がエストニアで研究を行う際の助成金。支援期間は1年～2年間

③パートナーシップ・連携助成（Partnership and Co-operation Funding）

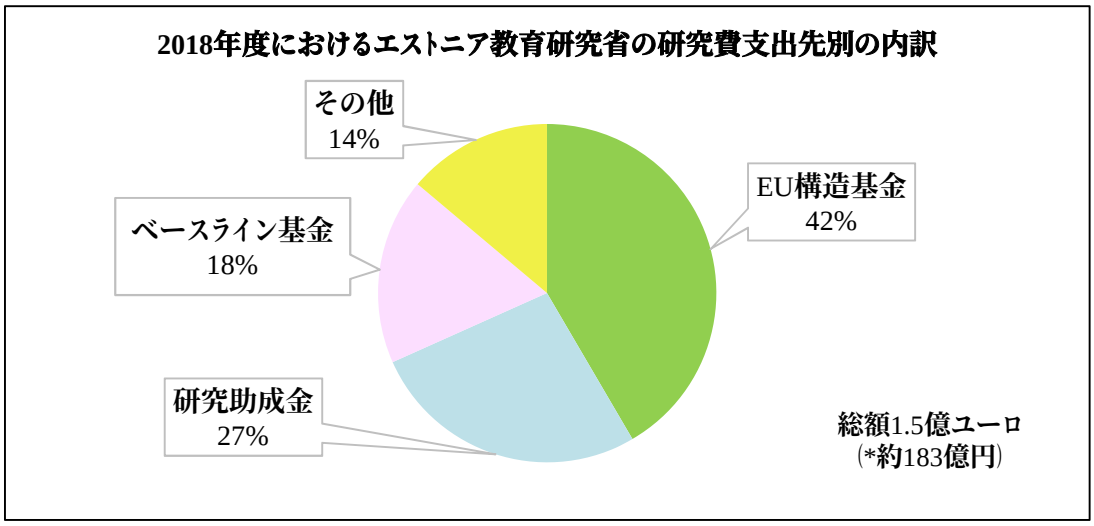
・欧州、バルト諸国の研究助成機関の間のパートナーシップ・連携を支援するための助成金

④研究基盤整備助成（Infrastructure Funding）

・国内の研究機関の基盤整備に係る助成金

⑤応用研究助成（Applied Research Funding）

・応用研究の支援に特化した助成金。主なプログラムは、研究機関と企業の連携を支援するための「NUTIKAS」、政府が国家政策を実施するための研究を支援する「RITA」の2つ



【出典】Estonian Research Council
https://www.etag.ee/en/activities/analysis/statistics-rd-funding-estonia/

3.日本との関わり

①日本学術振興会「外国人研究者招へい事業（外国人特別研究員・一般）」における同国の対応機関

②2019年度には、ETAg-JSPSの共催セミナーを開催予定

4. 主要な国際連携

①Horizon 2020

・EUの世界最大の研究・イノベーションの助成プログラムの国内担当機関として研究者・研究機関への助言等の実施

②Science Europe

・欧州の学術・研究助成機関の連合体

③EURAXESS

・EUの欧州における研究者・研究機関間の交流や共同研究を促進するためのネットワーク

④COST（The European Cooperation in Science and Technology）

・欧州の研究者間の連携を促進するネットワーク

北欧・バルト三国の学術・研究助成機関の紹介

コペンハーゲン大学（University of Copenhagen）

1479年に設立されたデンマーク最古の国立大学。豊富で国際化への対応が整備されたカリキュラムや、9名のノーベル賞受賞者を輩出した質の高い研究はヨーロッパ有数のレベルを誇る。

【出典】University of Copenhagen
https://studies.ku.dk/masters/application-and-admission/

1. 組織概要

○設立：1479年
○学校種：国立
○学長名：Henrik C. Wegener
○学生数：約39,000名
○大学間協力協定：約30か国の約140大学と協定を締結
○教職員数：約9,000名（うち研究者は約5,000名）
○主な卒業生：Tycho Brahe（天文学者）、Søren Kierkegaard（哲学者）、Niels Bohr（ノーベル物理学賞受賞者）、Niels Finsen（ノーベル医学・生理学賞受賞者）、Johannes Fibiger（ノーベル医学・生理学賞受賞者）、August Krogh（ノーベル医学・生理学賞受賞者）、Inge Lehmann（地震学者）、Lars Løkke Rasmussen（現デンマーク首相）など
○収益：86億デンマーククローネ（*約1,500億円）
○設置学部：「健康・医学部」、「人文学部」、「法学部」、「理学部」、「社会科学部」、「神学部」の6学部
○教育の特色：
・学士（3年間）、修士（2年間）、博士（3年間）の3つの学位が取得可能
・秋学期（9月～1月）、春学期（2月～6月）のセメスター制を採用
・全体の4.5%に相当する1,700名以上の留学生を受け入れ、留学生を対象に、①英語による修士課程の授業、②サマープログラム、③オンラインでの受講が可能な遠隔教育などを実施
・コペンハーゲン大学からは毎年約2,300名の学生を協定締結先の海外の大学に派遣
○研究の特色：
・学際的研究の主要テーマとして、以下の6分野を設定：「Asian Dynamics Initiative」、「Copenhagen School of Global Health」、「European Research」、「Global Development」、「Sustainability Science Center」、「Interdisciplinary Strengths」
・過去9名のノーベル賞受賞者に加え、毎年、EliteForsk賞（デンマーク高等教育科学省）、ERC（欧州研究評議会）研究助成金の受賞者多数

北欧・バルト三国の学術・研究助成機関の紹介

○産業界等との協働：

・産業界や公的機関との協働を最優先事項に掲げ、「共同研究」、「戦略的パートナーシップ」、「発明や特許へのアクセス」、「公的機関との協働」、「コンサルタント」などを実施

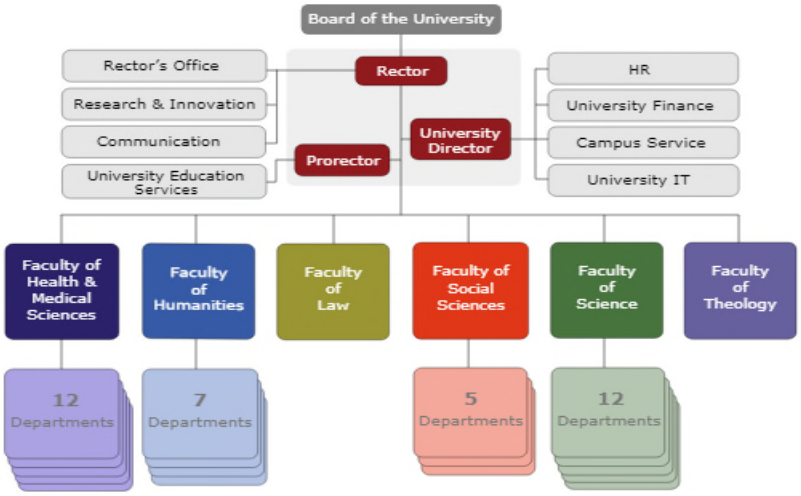
○世界大学ランキング：

・Academic Ranking of World Universities（ARWU）2018：第29位

・QS World University Rankings 2018：第79位

・Times Higher Education World University Rankings（THE）2019：第116位

○組織図：



【出典】University of Copenhagen
https://about.ku.dk/organisation/

2. 日本との関わり

①以下の大学と大学間協力協定を締結

中央大学、慶應義塾大学、熊本大学、明治大学、名古屋大学、大阪大学、立命館大学、西南学院大学、東北大学、東海大学、東京医科歯科大学、筑波大学、東京大学、早稲田大学

3. 主要な国際連携

①IARU（International Alliance of Research Universities）

・東京大学、オックスフォード大学、イエール大学など、将来のグローバルリーダーを養成する世界トップクラスの11の研究型大学で構成された大学連合

②LERU（League of European Research Universities）

・オックスフォード大学、ケンブリッジ大学など、学術研究分野に優れる23大学で構成された大学連合

③4EU+

・大学間の学問の自由・自治を保障することを目的とした大学連合

④UNICA（Network of Universities from the Capitals of Europe）

・ヨーロッパの首都にキャンパスがある、51大学で構成された大学連合

⑤Erasmus+

・欧州連合（EU）による教育、訓練、青少年、スポーツを対象とする助成プログラム

⑥Nordplus

・北欧閣僚理事会の教育プログラム

⑦UArctic（University of the Arctic）

・極地研究や教育を行う大学や研究機関の連合体

北欧・バルト三国で活躍する日本人研究者の紹介

今回は、2014年4月からデンマーク・コペンハーゲンにある北欧研究所（Japanordic）で代表として活躍されている安岡美佳さんを紹介する。

安岡 美佳　（やすおか　みか）

略歴：

2001年 3月	慶應義塾大学文学部図書館・情報学専攻卒業
2003年 3月	京都大学大学院情報学研究科博士前期課程修了
2010年 1月	コペンハーゲンIT大学（ITU）大学院博士課程修了 博士（コンピュータサイエンス）号取得 （東京大学大学院工学系研究科先端学際工学専攻単位取得退学）
2009年11月 - 2012年 3月	京都大学大学院情報学研究科グローバルCOE研究員
2012年 4月 - 2018年 3月	ITU研究員・助教授
2016年 4月 - 2018年 3月	デンマーク工科大学助手
2014年 4月 - 現在	北欧研究所（Japanordic）代表

Q:　現在、デンマークではどんな研究をされていますか？簡単に教えてください。

A: 私は、「北欧におけるITシステム構築手法としての参加型デザインやリビングラボの理論と実践」をテーマに研究を進めています。近年では、IoTやコンピュータシステムが人々のより良い生活にどのように貢献できるかといった社会課題の解決に、参加型デザインやリビングラボの知見を応用するプロジェクトに取り組んでいます。

研究室メンバーとの写真
（筆者は左奥）

北欧･バルト三国で活躍する日本人研究者の紹介

ITUでの授業の様子

Q: 現在の研究分野に興味を持ったきっかけを教えてください。

A: もともとシステムの使い勝手に関する研究をしており、人に役立つシステムと、社会におけるITに関心を持っていました。しかし、デンマークで研究をするにあたり、ITシステムが社会に根づき人々の生活に役立っていることを目の当たりにし、何が日本と違うのかに関心を持つようになり、現在に至っています。

Q: 現在の所属機関を選択した理由は何ですか？

A: 大学という環境では、自分が必要だと考える協働の仕組みや、社会や地域コミュニティにどっぷりと関わったアクションリサーチが難しかったため、2014年に現在私が代表を務める北欧研究所（Japanordic）を立ち上げました。当研究所は、日本とデンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランドの北欧諸国の相互理解及び交流の促進を目的とした調査･研究･関連のビジネスコンサルティングを行っています。

Q: 研究を行う上での一番の課題を教えてください。

A: 関心を持つ研究テーマが社会との接点がとても深く、産学官民の協働が不可欠な点です。それぞれのプロジェクトに関わる思惑やニーズが異なるため、まとめ上げるのが大変です。また、研究テーマが学際分野であるため既成の分野の論文になりにくいことも困難が伴います。

Q: 日本と比べて、デンマークの研究環境について、どのような印象をお持ちですか？

A: 分野にもよりますが、デンマークでは個々が自立していると同時に、コラボレーションを大切にするという環境があります。近年では、研究資金の削減や大型化が進み、他者や他機関と協力していかないと研究資金の獲得が困難になったり、成果主義が強化されたりする傾向が見られます。研究の独自性を維持しつつ、他との協力や社会との接点を探す必要がますます増えてくると思われ、研究者にとってもバランスのとれた社会性と組織への貢献が求められています。

高齢者対象のワークショップの様子

Q: 最後に、これからデンマークで研究を始めようと考えている研究者にメッセージをお願いします。

A: 研究の世界とはいえ、社会情勢の影響を多分に受けています。アジア人として欧州で研究を継続していくには、欧州で価値を評価される独自の強みが不可欠になると考えます。

私の分野では、日本のプレゼンスはそれほど高くなく、北欧域でアジア人の研究者にほとんど会うことはありません。会っても中国や韓国の研究者が大半です。

言語や文化の違いは、日本人が欧州でプレゼンスを高めるのに大きな障害になっています。あえて北欧で研究をしたいのであれば、分野におけるスキルを高めると同時に、自分の文化背景や研究が尊重される場を戦略的に求めていくことが不可欠だと考えます。

学術動向

スウェーデン：高等教育の一層の国際化に向けて

2018年10月31日、スウェーデンにおける高等教育の国際化に関する政府の特別調査官を務めるAgneta Bladh氏は、Helene Hellmark Knutsson高等教育・研究担当大臣（当時）に、報告書「魅力の増大－知識国家スウェーデンへの推進力」を提出した（詳細は、ニュースレター（日本語版）第61号の学術動向「高等教育の国際化に向けた戦略に係る調査結果を発表」を参照）。その中で、同国の高等教育の国際化を推し進めることで、多くの留学生を受け入れ、多くの助成金を受けられるようにすることの重要性を指摘した。

その後、2019年4月8日を期限として関係者に意見照会を行ったところ、約100もの機関からコメントが寄せられ、大半は同調査官の提案を強く支持するものであった。とりわけ、在外のスウェーデン大使館からは、高等教育及び研究に関する機関を増加させることに対する賛同が寄せられた。このほか、スウェーデン高等教育協会（SUHF）からは入国手続きや審査時間の大幅な短縮の必要性について、スウェーデン高等教育評議会（UHR）からは留学生に対する奨学金の増額についての要望があがった。スウェーデン研究・高等教育国際協力財団（STINT）事務局長のAndreas Göthenberg氏は、トレンドの分析と海外での存在感を高めるための提案を歓迎し、STINTは国際化戦略の立案など様々な側面からの協力が可能であるとコメントした。

今後、Matilda Ernkrans大臣は、2020年の早い時期に現行の提案を国会に提出するか、代替案を策定するかの判断が待たれる。

【出典】University World News
https://www.universityworldnews.com/post.php?story=20190426101137263

スウェーデン：大学における男女共同参画への過去最大の投資

2019年1月からチャルマース工科大学で開始された、大学における男女間の不均衡を是正するための戦略的計画GENIE（Gender Initiative for Excellence）は、この分野での過去最大の投資になる可能性があるとして、注目を浴びている。3億スウェーデンクローナ（*約34.7億円）をかけて、教員採用の仕組みはもとより、大学の風土、制度、手続き面の具体的な検証を行い、2029年までに同大学における女性教授の割合を現行の17%から40%に達することを目指す。

GENIEの包括的な目標は、女性教員の割合の増加、女性のキャリア構築における障壁の除去、多様で包括的な職場環境の構築を実現し、これによって教育と研究の卓越性を支援することである。

チャルマース工科大学
https://www.chalmers.se/en/about-chalmers/Pages/find-your-way-to-chalmers.aspx

【出典】University World News
https://www.universityworldnews.com/post.php?story=20190410073042444

学術動向

スウェーデン：ストックホルム3大学が協定を締結

2019年5月27日、KI、スウェーデン王立工科大学、ストックホルム大学の3大学は、相互連携を強化し、ストックホルム地域の発展、及び国際的な競争力を持つ優れた教育や研究環境をアピールすることを目的とした協定を締結した。

KIのOttersen学長は、「3大学はそれぞれ強い分野があるが、連携することで、より効果的に既存の資源を活用して教育と研究の質の向上に寄与することができる」と期待を寄せる。

3学長による調印式
https://www.su.se/om-oss/organisation/karolinska-institutet-kth-och-stockholms-universitet-bildar-universitetsalliansen-stockholm-trio-1.439665

【出典】
KI
https://news.ki.se/karolinska-institutet-kth-and-stockholm-university-form-the-university-alliance-stockholm-trio
KTH Royal Institute of Technology
https://intra.kth.se/en/aktuellt/nyheter/karolinska-institutet-kth-och-stockholms-universitet-bildar-universitetsalliansen-stockholm-trio-1.906634
Stockholm University
https://www.su.se/english/collaboration/collaboration-news/karolinska-institutet-kth-and-stockholm-university-form-the-university-alliance-stockholm-trio-1.439663

ノルウェー：エルゼビア社とオープンアクセスに関する新たな契約を締結

2019年4月23日、長期にわたる交渉の末、ノルウェーの研究者に対して、エルゼビア社の大半の学術雑誌に追加料金なしでオープンアクセス（OA）の公開を保証する、国家的ライセンスに合意したことが発表された。

今回の契約は試験的で期間は2年間。これによりノルウェーの7大学、39研究機関のエルゼビア社の学術雑誌へのアクセスと、ノルウェーの研究者のOA出版が可能になる。

スウェーデン、ドイツ、ハンガリー等の他のヨーロッパの国々もコンソーシアムを組み、同様のライセンス契約の交渉を行っているが、合意には至っていない。このような中、ノルウェーがエルゼビア社と新たなOA契約を締結した最初の国となった。

【出典】
University World News
https://www.universityworldnews.com/post.php?story=20190426135640601
University of Oslo
https://www.uio.no/english/about/news-and-events/news/2019/unique-agreement-with-elsevier-ensures-open-access.html

学術動向

ノルウェー：BrexitによるHorizon2020への影響

EUとの撤退協定に伴い、英国は、2019年3月29日にEUから撤退した後も、引き続き関連国としてEUの研究とイノベーションのための枠組み計画Horizon2020に参加することができる。これは、2020年12月の同プログラム終了時まで適用される。協定の下では、英国からの参加者はEU加盟国又は関連国と同様に、すべてのプログラムで、研究助成金を受け取るだけでなく、同プログラムの新たな研究助成金を申請することができる。

英国議会が英国とEU間の撤退協定を否決したことで、いわゆるハードBrexit（合意なき離脱）の公算が高まっている。したがって、Horizon2020に参加しているノルウェーの研究機関、企業、公的機関、及びその他の関係者は、同プログラムにおける英国の地位が第三国となるハードBrexitに備える必要が生じている。

同プログラムの規程により第三国の参加に制限が設けられているため、英国が第三国の地位になることで、以下3点を含む多大な影響が発生する。

- 3つの異なるEU加盟国又は関連国から少なくとも3名の参加者が必要な合同プロジェクトがある。そのプロジェクトにおいて、3つのEU加盟国のうちの1つが英国からの参加である場合、ハードBrexitにより、その合同プロジェクトは問題を抱えることになる。
- 欧州研究評議会（ERC）や欧州委員会の研究助成プログラムMarie Skłodowska-Curie Actionsなど個々の研究者を支援するプログラムに第三国はアクセスできない。
- 英国当局からの資金援助は英国の研究機関のためのプロジェクトが対象となる。プロジェクトコーディネーターが他のパートナーに資金配分する段階的な補助金の使用を含むプロジェクトは英国の保証の対象外である。そのため、英国当局の保証対象外のプロジェクトにおいては、継続が困難になる可能性がある。

上記の状況を踏まえ、英国とのプロジェクトの内容変更や契約の再交渉に対処する準備が求められている。

【出典】The Research Council of Norway
https://www.forskningsradet.no/en/news/2019/what-does-brexit-mean-for-norwegian-horizon-2020-participants/

デンマーク：調査研究での倫理観を育む新プロジェクトへの参画

コペンハーゲン大学の研究者は、欧州の主要な研究プロジェクトintegrityに参画する。本プロジェクトは、高校や大学の教員を対象に、調査研究を行う上での倫理観を教育する際に必要な知識や教材を授けることを目的としている。

同大学では、過去8年間、学士課程と修士課程の学生を対象に同様のプロジェクトを実施してきたが、今回のプロジェクトでは新たに高校生を対象に加えた。

同大学のPeter Sandøe教授は、オンライン上で見つけた内容を書き直して、論文を作成することは全く問題ないと考えるなど若者の中には盗用について正しく理解していない者も少なくないこと、さらに、研究者に多くの出版物の作成を促す昨今の風潮が研究の質の低下や信頼性の欠如を引き起こす要因になっていることを指摘する。

本プロジェクトの予算は、Horizon2020の経費から240万ユーロ（*約2億8千万円）が支出される。

【出典】The Research Council of Norway
https://news.ku.dk/all_news/2019/04/key-role-for-denmark-in-major-european-project-on-responsible-conduct-of-studies-and-research/

学術動向

デンマーク：AIに係る国家戦略の策定

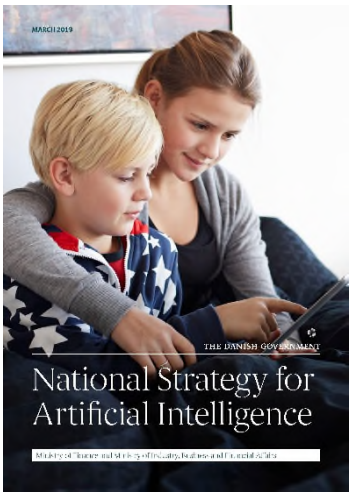
2019年3月14日、デンマーク政府は、AI（人工知能）に係る国家戦略（NSAI）を公表した。同戦略では、デンマークがAIの開発と活用の両面で世界をリードすることを目指して、下記に示す4つの目標と4つの重点分野を掲げている。

＜4つの目標＞

1. AIに関して人間中心で共通の倫理基盤を持つ。
2. 研究者はAIの研究開発を行う。
3. ビジネスはAIの開発と活用を通して成長を成し遂げる。
4. 公共セクターは世界有数のサービスを提供するためにAIを活用する。

＜4つの重点分野＞

1. AIに係る法的･倫理的枠組みの基盤整備
2. 多くの高品質のデータへのアクセス機会の確保
3. デジタル･コンピテンシーと正しい知識を有する人材の育成
4. AIの成長と発展に寄与する投資の増加



AIに係る国家戦略
https://eng.em.dk/media/13081/305755-gb-version_4k.pdf

国家戦略（英語）の全文は以下を参照。
https://eng.em.dk/media/13081/305755-gb-version_4k.pdf

【出典】
ComputerWeekly.com
https://www.computerweekly.com/news/252464063/Danish-government-launches-national-AI-strategy
Agency for Digitisation
https://en.digst.dk/policy-and-strategy/denmark-s-national-strategy-for-artificial-intelligence/

フィンランド：2020年からの大学入学資格試験の改正を発表

2019年3月14日、フィンランド政府は、2020年から実施される大学入学資格試験の改正を発表した。同国の大学への進学を希望する者は、高校卒業後、日本の大学入試センター試験に相当する大学入学資格試験（Matriculation Examination）に合格しなければならない。

今回の改正点は、春と秋に計2回実施されている資格試験を、新たに春に2回行うこととし、秋と合わせて計3回の実施とすることである。改正の目的は、従来よりも早くフィンランド国外の受験者に合否を通知することである。また、受験者にとってもフィンランドの大学に出願しやすくなること、大学にとっても国際交流の促進に向けた自助努力を促すなどのメリットが期待される。

新制度では、春の1回目に外国語と一部の大学のプログラム、2回目に第2公用語（フィンランド語、スウェーデン語）の試験が行われる。なお、春の2回目と秋の試験では、受験科目の選択が可能となる。

本決定に至る経緯については、ニュースレター（日本語版）第61号の学術動向「高等学校卒業資格試験制度の改革に関する法案の提出」を参照。

【出典】Ministry of Education and Culture, Finland
https://minedu.fi/en/article/-/asset_publisher/korkeakoulujen-kevaan-yhteishaku-uudistuu

学術動向

フィンランド：持続可能な開発推進のための方針の改定

2019年2月、フィンランド・アカデミー（AKA）理事会は、現行の「持続可能な開発」推進のための方針を改定することを決定した。Laura Raaska AKAバイオサイエンス・健康・環境部長によれば、改定の趣旨は持続可能な開発の原理を一層顕在化させることであり、助成プログラムの申請者に対し、当該研究が及ぼす効果の記述の一部として持続可能な開発との関連性を明記させることとしている。方針を策定した2015年当初は特定の研究のみが対象だったが、今回これをすべてのプログラムに拡大する。

2015年に国連で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）の概念は、Horizon2020、Joint Programming Initiative、9th Framework ProgrammeなどのEUのプログラムのほか、AKAのWater JPIプログラムに明確に反映されている。

持続可能な開発目標
https://www.un.org/sustainabledevelopment/news/communications-material/

【出典】Academy of Finland
https://www.aka.fi/en/about-us/media/whats-new/2018/academy-of-finland-reaffirms-its-sustainable-development-policy/

Nature Index 2019 を発表

2019年6月19日、英科学誌Natureを発行するSpringer Nature社は、Nature Index 2019を発表した。

Nature Indexは独自に厳選した高品質の科学誌に発表された研究論文を蓄積する論文著者所属情報のデータベースで、2014年以降、毎年発表されている。

2019年度版では、北欧諸国について、国別ではスウェーデンが15位、デンマークが20位、フィンランドが25位、ノルウェーが27位であった。機関別では、コペンハーゲン大学（デンマーク）が71位、ウプサラ大学（スウェーデン）が132位、オスロ大学（ノルウェー）が236位、ヘルシンキ大学（フィンランド）が247位となった。また、同調査で日本は5位、機関別では東京大学が9位、京都大学が31位にそれぞれランクインした。

コペンハーゲン大学（デンマーク）、オーフス大学（デンマーク）、デンマーク工科大学（デンマーク）が昨年度から順位を上げ、国別でもデンマークは昨年度の22位から今年度は20位に上昇した。

Nature Index 2019の詳細は以下を参照。

＜国別＞https://www.natureindex.com/annual-tables/2019/country/all

＜機関別＞https://www.natureindex.com/annual-tables/2019/institution/all/all

【出典】Nature Index
https://www.natureindex.com/annual-tables/2019#tables

（注）掲載内容は、ストックホルム研究連絡センターにおいて仮訳し、本文に記載のない箇所で説明が必要な個所を追記したものである。なお、*については当センターで円換算（概算）した金額である。

お知らせ

イベント予定

セミナー・シンポジウムの開催については随時ホームページでお知らせしています。詳細は、ストックホルム研究連絡センターHP（https://www.jsps-sto.com/events/category/events/）を御覧ください。最新情報を御希望の方は以下のURLから登録してください。
https://www.jsps-sto.com/contact-us/

●2019年度第1回JSPSスウェーデン同窓会セミナー　～「日本とスウェーデンにおけるAI」～
日時／会場：2019年9月24日（火）・25日（水）リンショーピン大学（スウェーデン）
講師：牧 淳人氏（スウェーデン王立工科大学准教授）他
参考：https://www.jsps-sto.com/event/the-sac-activity-seminar-2019-1/
※参加を希望される方は、9月17日（火）までに上記ウェブサイトから事前登録をお願いします。

●2019年度ETAg（エストニア研究評議会）-JSPSセミナー
日時／会場：2019年9月26日（木）Centennial Hotel Tallinn（エストニア）
講師：陰山 洋氏（京都大学大学院工学研究科物質エネルギー化学専攻教授）
：Mikk Lippmaa氏（東京大学大学院新領域創成科学研究科物質系専攻教授）他

●2019年度第3回KVA-JSPSセミナー
日時／会場：2019年10月1日（火）チャルマース工科大学（スウェーデン）
2019年10月3日（木）AlbaNova University Center（スウェーデン）
講師：中村 泰信氏（東京大学先端科学技術センター教授、理化学研究所創発物性科学研究センターチームリーダー）
参考：https://www.jsps-sto.com/event/the-3rd-kva-jsps-seminar-fy2019-with-yasunobu-nakamura/（10月1日）
https://www.jsps-sto.com/event/the-3rd-kva-jsps-seminar-fy2019-with-yasunobu-nakamura-2/（10月3日）

●2019年度JSPSデンマーク同窓会セミナー　～「教授法の研究と指導の実践に関する研究会」～
日時／会場：2019年10月8日（火）コペンハーゲン大学（デンマーク）
講師：大滝 孝治氏（北海道教育大学特任講師）他
参考：https://www.ind.ku.dk/winslow/winslow/seminars/lessonstudy/LS-activityseminar.pdf
※参加を希望される方は、9月1日（日）までに上記ウェブサイトから事前登録をお願いします。

●JSPSノルウェー同窓会設立記念式典
日時／会場：2019年10月17日（木）ノルウェー研究評議会（RCN）（ノルウェー）

●2019年度RCN-JSPSセミナー
日時／会場：2019年10月17日（木）RCN（ノルウェー）
講師：菊地 隆氏（海洋研究開発機構（JAMSTEC）北極環境変動総合研究センター（IACE）センター長）他

お知らせ

●2019年度JSPSフィンランド同窓会セミナー　～「細胞と組織の微小環境における生体材料」～

日時／会場：2019年10月24日（木）・25日（金）トゥルク大学（フィンランド）
講師：塙 隆夫氏（東京医科歯科大学教授）他
参考：https://www.jsps-sto.com/event/acf-activity-seminar-2019/
※参加を希望される方は、10月15日（火）までに上記ウェブサイトから事前登録をお願いします。

●2019年度第2回JSPSスウェーデン同窓会セミナー

日時／会場：2019年10月28日（月）KI Huddinge キャンパス（スウェーデン）
講師：越智 光夫氏（広島大学学長）、Rolf Christer氏（カロリンスカ医科大学教授）他

●2019年度IVA-JSPSセミナー

日時／会場：2019年11月28日（木）スウェーデン王立工学アカデミー（IVA）（スウェーデン）

●JSPSフィンランド同窓会設立10周年記念式典

日時／会場：2019年12月12日（木）フィンランド・アカデミー（AKA）（フィンランド）

●2019年度All Alumni Meeting in Finland

日時／会場：2019年12月12日（木）AKA（フィンランド）

公募中の事業

●2020年度JSPS同窓会セミナー

2020年度に開催するスウェーデン、フィンランド、デンマーク、ノルウェーの各同窓会セミナーの応募を受け付けます。申請期間は8月1日（木）から10月31日（木）までです。
https://www.jsps-sto.com/event/call-for-alumni-club-activity-seminar-applications-fy2020-for-sac-acf-acd-and-acn/

●2020年度外国人研究者招へい事業（外国人招へい研究者（長期、短期））

諸外国の優秀な研究者を招へいし、日本の研究者との共同研究、討議、意見交換等を行う機会を提供する事業。2019年度第1回の申請期間は、長期、短期共に7月6日（土）から9月6日（金）までです。
2回目以降のスケジュールについては、以下URLを参照。
https://www.jsps.go.jp/j-inv/boshu/2020boshu.html

●2020年度外国人研究者招へい事業（外国人特別研究員（一般、欧米短期））

日本の大学等において受入研究者の指導のもとに共同して研究に従事する機会を提供する事業。2019年度第1回の申請期間は、一般が7月6日（土）から9月6日（金）、欧米短期が8月4日（日）から10月4日（金）までです。
2回目以降のスケジュールについては、以下URLを参照。
https://www.jsps.go.jp/j-fellow/j-fellow_14/31_boshuyoko_2020.html

お知らせ

●2020年度二国間交流事業（共同研究・セミナー）

日本の大学等の優れた研究者が相手国の研究者と協力して行う共同研究・セミナーの実施に要する経費を支援する事業。申請期間は8月29日（木）から9月4日（水）までです。なお、対応機関によって申請の締切が異なりますので御留意ください。

http://www.jsps.go.jp/j-bilat/semina/jrss.html （日本語版）
https://www.jsps.go.jp/english/e-bilat/index.html （英語版）

●2020年度二国間交流事業（研究者交流（特定国派遣研究者））

本事業は、日本の研究者と相手国の研究者との交流を推進するため、研究者交流事業（特定国派遣研究者）を実施する事業。申請期間は8月21日（水）から9月4日（水）までです。なお、対応機関によって申請の締切が異なりますので御留意ください。

https://www.jsps.go.jp/j-bilat/tokuteikoku/ex.html

●2020 年度リンダウ・ノーベル賞受賞者会議派遣事業参加者募集

リンダウ・ノーベル賞受賞者会議評議会及びリンダウ・ノーベル賞受賞者会議基金が主催する「リンダウ・ノーベル賞受賞者会議」に参加することを支援する事業。申請期間は6月3日（月）から8月8日（木）までです。

https://www.jsps.go.jp/j-lindau/shinsei_boshu.html?fbclid=IwAR1

お知らせ

●ストックホルム研究連絡センターのパンフレットを改訂

当センターの活動概要やJSPS本部の国際交流事業に関する最新情報をまとめたパンフレットを改訂しました。HPからも御覧いただけます。

https://www.jsps-sto.com/wp-content/uploads/2019/07/2019brochure.pdf

●メールマガジンの配信

2019年4月からメールマガジンの配信を開始しました。当センターで実施するセミナーやシンポジウム、同窓会活動だけでなく、招へい事業や研究支援事業の募集等最新の情報をメールにて配信しています。配信を希望される方は、https://www.jsps-sto.com/newsletter-2/emailmagazine/から御登録ください。今後も随時配信してまいりますので、是非御講読ください。

お知らせ

その他

日本人研究者の会について

ストックホルム研究連絡センターでは、北欧諸国及びバルト三国で研究活動を行っている研究者を対象に、イベント情報の発信やネットワーキングのためのイベントを開催しています。まだ、当センターの研究者リストに登録いただいていない方は、こちら（https://www.jsps-sto.com/to-japanese-researchers/）から登録してください。ニュースレター、各種セミナー、イベントの情報を定期的にお知らせします。

JSPS Stockholm Newsletterの定期購読について

ニュースレターの定期購読を希望される場合は、以下のウェブサイトから登録してください。電子メールにて配信します。
https://www.jsps-sto.com/newsletter-2/

「EU一般データ保護規則（GDPR）」の適用を踏まえた個人情報の取扱いについて

2018年5月25日よりGDPRが施行されたことを踏まえ、ストックホルム研究連絡センターでは当規則に基づいて個人情報の取扱いに留意しています。北欧在住の日本人研究者を含む関係者の皆様の御理解と御協力をお願い申し上げます。GDPRの施行を踏まえた個人情報の取扱いに関してお問い合わせがございましたら、当センターまでお知らせください。

表紙写真：ヘルシンキ大聖堂

フィンランド・ヘルシンキの市中心にあり、ヘルシンキのシンボルでもあるヘルシンキ大聖堂は、ドイツ人建築家のカール・ルートヴィッヒ・エンゲルが設計し、1852年に竣工した。フィンランドと日本は2019年に外交関係樹立100周年を迎え、両国において様々な交流プログラムが企画されている。
（撮影 和泉一義）

次号の発行予定日：
次号は2019年11月下旬に発行予定。

JSPSストックホルム研究連絡センター　第63号
編集長：吉原　誉夫
編　集：和泉　一義
発行日：2019年8月6日（火）
発行元：日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター
連絡先：JSPS Stockholm Office, Retzius väg 3, 171 65 Solna, Sweden
Phone: +46 (0) 8 5248 4561
Website: https://www.jsps-sto.com
E-mail: jsps-sto@jsps-sto.com
Facebook：JSPS Stockholm Office

JSPS
STOCKHOLM